

●高田公園オーレンプラザ開館記念事業●



オーレンプラザクリスマスフェスティバル

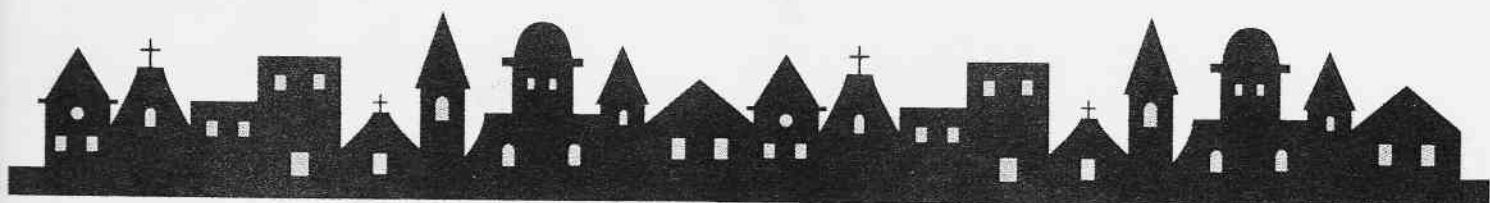
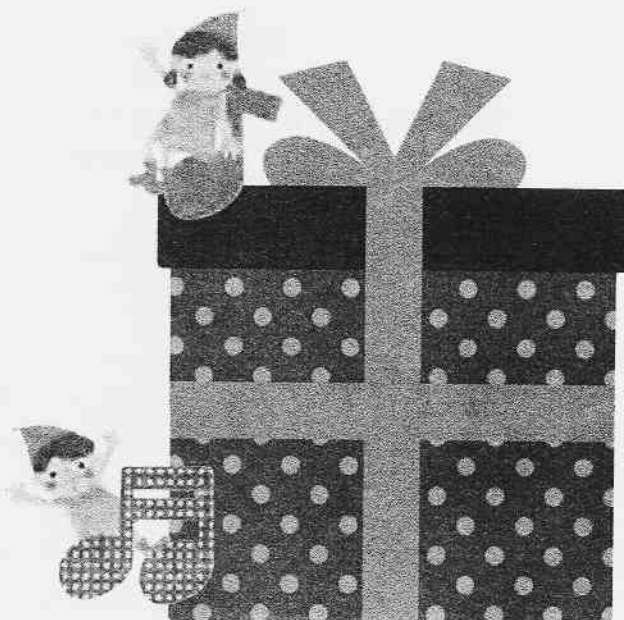
上越交響楽団 & 上越市民吹奏楽団 ジョイントコンサート

2017.12/17(日) 16:00開演

会場：高田公園オーレンプラザ

出演：上越交響楽団 / 上越市民吹奏楽団

主催：上越市教育委員会



ごあいさつ

本日は、高田公園オーレンプラザ開館記念事業のクリスマスフェスティバルにお越しくださいまして、誠にありがとうございます。

9月末のオープン以来、毎日多くの市民の皆様から当館をご利用いただいております。活発な市民活動が繰り広げられていることを大変うれしく思います。

このたびは、当館をご利用いただいている上越交響楽団と上越市民吹奏楽団の皆様にご協力をお願いし、子どもから大人まで、幅広い世代の方々から気軽に音楽を楽しんでいただけるようなコンサートを企画いたしました。また、市内の5つの合唱団の皆様からもロビーでも歌声を響かせていただき、たくさんのご来館の皆様から音楽と触れあっていただけるようなイベントといたしました。

このイベントには、上越市の友好都市である韓国・浦項市の市立交響楽団と合唱団の皆さんからもご参加いただく予定でしたが、先月発生した地震の影響で来日が見送られ、共演がなくなってしまうまいりました。一日も早い復旧と復興を、心から願っております。

まもなく当地も白い世界に覆われますが、当館から南堀越しに見える街並みや雪化粧した南葉山など、高田公園の新しい冬景色をご覧にお出かけください。

笑顔でクリスマスと新年を迎えられますよう、本日は、素晴らしい演奏をお楽しみください。

上越市教育委員会 教育長 野澤 眞

指揮者

Masanori Hasegawa

長谷川正規

東京藝術大学音楽学部器楽科(チューバ専攻)を卒業。同大学大学院音楽研究科修士課程修了。学部在学中に安宅賞を受賞。ソリストして、松尾葉子指揮藝大フィルハーモニア、故岩城宏之指揮オーケストラアンサンブル・金沢等と共演。チューバ奏者として管弦楽・吹奏楽・室内楽の領域で活動するほか、指揮の活動も盛んに行っており、上越交響楽団、上越市民吹奏楽団、新潟市北区フィルハーモニー管弦楽団の定期公演をはじめ、ミュージカル「春のホタル」、オペラ「ヘンゼルとグレーテル」「愛の妙薬」「売られた花嫁」等で指揮者を務める。これまでにチューバを稲川榮一氏に師事。現在、上越教育大学大学院学校教育研究科准教授。



コンサートマスター

Ken-ichi Samizo

三溝健一

松本市出身。4歳よりヴァイオリンを始め、片岡世界、正岡絃子、山岡耕裕、天満敦子の各氏にヴァイオリンを、東京音楽大学にて井上將興氏にヴァイオリン及び室内楽を師事。肥沼きよ、竹内邦光、丸山嘉夫、松本紀久雄、汐澤安彦の各氏にピアノ・ソルフェージュ・音楽学・指揮法を師事。大学在学中よりソロ・室内楽・オーケストラ・オペラ等、幅広く演奏活動を行う。殊に「ENSEMBLE“ 藝弦 ”(弦楽合奏)」「室内楽“EAU”(ピアノアンサンブル)」を中心に研鑽を積み現在は「音泉室内合奏団」を主軸に活動を展開、編曲も多数手掛けている。また、関東信越各地の市民・学生オーケストラと室内楽にて演奏指導と活動の発展に尽力、また初心者から専門課程の学生及び演奏家の個人レッスンなど広く後進の育成にもあたる。足立シティオーケストラ・松本交響楽団・上越交響楽団・柏崎フィルハーモニー管弦楽団、他／常任・客演コンサートマスター、副指揮者(足立・松本)。音泉室内合奏団／ソロ・コンサートマスター、音楽監督。池袋音楽学院 講師。Gruppo Violini 主任講師。Musica Rospo 主幹。



プログラム&曲目解説

司会：小林由香里

オープニング

上越交響楽団 & 上越市民吹奏楽団 選抜メンバーによる

■ユープランド/市民のためのファンファーレ

1942年に作曲されたファンファーレ。20世紀音楽の中で最も分かりやすい作品の一つであり、アメリカ合衆国が生んだ芸術音楽の古典に位置づけられています。また、戦後オリンピックのファンファーレの類型を作り出したとも言われています。

吹奏楽ステージ

出演：上越市民吹奏楽団

■J.V=デル・ロースト/コンサートマーチ「アーセナル」

作曲者のヤン・ヴァンデルローストは1956年、ベルギー出身。

この曲はベルギーで最初に鉄道が開通した鉄道工場吹奏楽団の委嘱で、創立50周年を記念して1995年に作曲されました。イギリス風の格調高い式典行進曲を意識して書かれており、行進を目的としたものではなく、曲調はタイトル通り「コンサートマーチ」となっています。日本においても、コンサートの演奏機会も多い作品です。

■E. コフィールド/トロンボナンザ

トロンボーン・セクション(3パート)をフィーチャーした吹奏楽オリジナルの小品。

とても愛らしく親しみやすい、ラテンのリズムにのった天真爛漫な曲想は、トロンボーンという楽器の持つ「陽気さ」「ユーモラスさ」というものを、ストレートに伝えています。

楽曲から発散されるエネルギーは心地よく、最後まで賑やかな音楽は聴く者をハッピーな気分にはさせてくれます。

■ジングルベル in swing (編曲：福田洋介)

定番の「ジングル・ベル」をカッコよく、スウィングにアレンジした一曲。

雪原を疾走する情景を彷彿とさせる、軽快なテンポに乗せて、合間に「もろびとこざりて」もはさみながら、颯爽と展開していきます。

中間部となる「もろびとこざりては」日本でも有名なクリスマス讃美歌です。

しかし、今回のアレンジでは、それまでの力をそのままに、ビブラフォンとトロンボーンのソロが盛り込まれた聴きどころとなっています。

■A・リード/アレルヤ! ラウダム・テ 《オルガン付き》

アレルヤ・ラウダム・テとは、アレルヤ=神を賛美して叫ぶ声、ラウダムス=私たちは誉め称える、テ=あなたをと訳され、「我ら汝を誉め称えん」という意味になります。アルフレッド・リードの作品中最も感動的な作品の一つに上げられる名曲です。

トランペットの格調高いファンファーレと荘厳なブラスと打楽器群に始まり、美しいクラリネットのメロディーへ受け継がれます。

そのままフィナーレまでコーラル風に展開して、再度冒頭の輝かしいファンファーレで幕を閉じます。《オルガン付き》とあるように、原曲にあるパイプオルガン(音)を加えた壮麗な響きをお届けします。

■和泉宏隆/宝島 (編曲：真島俊夫)

日本を代表するポップ・インストゥルメンタル・バンド「T-SQUARE」の代表曲。

1986年の発表以来、吹奏楽でもお馴染みのナンバーとなり幅広く親しまれ続けています。

キャッチーなメロディー、グルーヴィーなリズムが一体となって紡ぎだされる音楽は、誰の胸にも宿っている宝島を見つけ出してくれることでしょう。

～休憩～

管弦楽ステージ

出演：上越交響楽団

■シベリウス/アンダンテ・フェスティヴォ

シベリウスは1922年冬にセイネトサロ製作所という企業の25周年記念式典のために、祝祭カンタータの作曲を依頼されましたが、ささやかな弦楽四重奏曲「アンダンテ・フェスティヴォ」を制作しました。カンタータに仕立てなかった理由は不明ですが、短編ながらも祝祭行事にふさわしい音楽に仕上がりました。その後の経過に、世界的に有名であったシベリウスならではのエピソードがあります。

アメリカの音楽評論家の発案で、シベリウスからの新年祝賀メッセージをアメリカにラジオ生中継する提案がありました。シベリウスは快諾し「アンダンテ・フェスティヴォ」の演奏により応じることとし、1939年1月1日に作曲者自身の指揮でアメリカに生放送されました。

演奏にあたりシベリウスは弦楽四重奏曲を弦楽合奏版に改編しています。今回の演奏は、より荘厳な響きを持つ弦楽合奏版によります。曲は透きとおった天空に大きな弧を描くような朗々とした主題で開始します。暖かさと慈しみを内側に秘めつつ多彩な陰影を加え、最後は力強いアーメン終止で結ばれます。

■チャイコフスキー/バレエ組曲「くるみ割り人形」作品71aから

「くるみ割り人形」はドイツの作家ホフマンの童話に基づいた物語で、クリスマス・ツリーのある客間で繰り広げられます。

物語をバレエに仕立てるために作曲された曲を基に、チャイコフスキー自身が編曲した組曲から「行進曲」「あし笛の踊り」「トレパーク」を演奏します。

■J.シュトラウス/ワルツ「美しき青きドナウ」

ウィーンワルツで最も有名な曲です。19世紀のオーストリア・ウィーンは俗に踊る世紀と称されるほど、シュトラウス父子やランナーのワルツやポルカにのって踊りに熱狂した時代でした。しかし、1866年にオーストリアが宿敵プロシヤとの戦争に敗北を喫したショックにより、誇り高いウィーンの人々は気力をなくしてしまいました。そんな時期に暗い空気を一掃するかのようして作曲されたのがこの曲です。当初、ウィーン合唱協会のために作曲されたものですが、パリ万博で演奏された際に大喝采を浴びたことがきっかけとなり、広く親しまれるようになりました。曲はドナウ川の静かな流れを思わせる長い序奏に続き、5つのワルツと後奏で構成され、まさに一篇の音詩とも言うべき内容を備えています。



上越交響楽団 & 上越市民吹奏楽団 合同ステージ

■ラヴェル／ボレロ (合同演奏特別バージョン)

ラヴェルの作品のなかでも特に有名な「ボレロ」は、ロシアバレエ団の舞踏家ルビンティンが自身の主宰するバレエ団のために委嘱したものです。バレエの初演はルビンティンを主役として1928年11月にパリ・オペラ座で行われました。舞台はスペインの小さな酒場。若い女性が舞台で物憂げなボレロを踊りはじめ、次第に周りの人々も踊りに引き込まれて、最後には全員が踊りに熱狂するという筋書きです。ラヴェル自身はオーケストラのレパートリーとして定着するとは予期していませんでしたが、この作品は爆発的な成功を収め、ラヴェルの名を世に広めることになりました。

この曲はスペイン舞曲の一種であるボレロのリズムに乗って、スペイン＝アラブ風の主題が徹頭徹尾繰り返されるという単純かつ大胆な形式によって書かれています。主題はフルートのソロに始まり、楽器の組み合わせをさまざまに変えながら次第に厚みを増していきます。冒頭に特徴あるリズム主題が小太鼓によって最弱音で奏でられ、弦楽器のピッツィカートがリズムの重点を補強します。このリズムが340小節からなる全曲のなかで169回も打ち鳴らされ続け、他の楽器が随時そのリズムに加わります。リズムから解放されるのは最後の2小節だけです。リズムの上で主題と応答旋律が色々な独奏楽器によってそれぞれ9回現れます。終始一貫して主題の変奏や展開などは一切行われず、もっぱら楽器による音色の変化と音量の増大に焦点が当てられ「音色のパッサカリア」と評されるほど楽器法上の変化に富む作品になっています。



◆上越交響楽団

団長 古海法雲

1972年(昭和47年)に結成されました。当時の日本の高度経済成長に呼応するように、アマチュア音楽家の活動が全国的に活性化される流れのなか、上越においても市民オーケストラ結成の機運が高まり、地域の高校管弦楽団OBら有志が集って演奏会を開催して以来、年2回開催している定期演奏会や各方面からの依頼演奏会を通して皆様に親しまれてまいりました。現在は、指揮者に長谷川正規氏、コンサートマスターに三溝健一氏を迎えて充実した活動を展開しています。



◆上越市民吹奏楽団

団長 藤澤紀章

昭和59年結成。当時上越エリアで活動中の3団体の吹奏楽団が合併し、現在の形となりました。上越市出身の箕輪響氏を音楽監督として、姉妹バンドである尾西ウィンドオーケストラとの交流演奏会や、故アルフレッド・リード、ジェームズ・バーンズ、汐澤安彦、天沼裕子等の著名な作曲家・指揮者による演奏会を開催。平成26年4月、上越文化会館のご支援により、結成30年を記念して、シエナ・ウィンド・オーケストラとのジョイントコンサートを開催。来年10月にふたたび同オーケストラとのジョイントコンサートを開催予定です。現在、年2回の演奏会を核として、上越地域に関係するアーティストとのジョイントコンサート、地域イベントや施設等での演奏も可能な限り行い、地域に根差した活動を展開しています。

